

受難節の讃美歌<血しおしたたる> (讃美歌 21-311)を歌うと、祖母 菊池やゑを思い出さずにはいられません。この曲はバッハのマタイ受難曲のコラールに繰り返し使われています。

1957年、祖母は脳内出血で突然倒れ、昔のことでもあり、治療法がなく、床に就きました。私は枕元に座って、頭痛を訴える祖母の頭を撫で続けました。祖母は私に「讃美歌を歌って」と頼みました。中学2年生の私は、知っている限りに色々歌いましたが、祖母はいつも<血しおしたたる>を頼みました。わずか11日後に、74歳で亡くなり、3月24日は祖母の命日です。この讃美歌の歌詞の2番が祖母の心の叫びだったと私は想像しています。



主の苦しみは わがためなり。 我こそ罪に 死すべきなり。  
かかろわが身に 代わりまし 主の憐れみは いと尊し。



祖母は男勝りでした。1883年(明治16)、津軽藩の下級武士だった家庭の長女として生まれました。14歳で母親を失い、父親は生活力はありませんでしたので、幼い弟妹がいる貧しい家計を助けて、弟を僧籍に入れ、妹を結婚させて、祖母は働き続けました。そして、20歳の時、24歳の大吉と出会い、愛し合うようになりました。大吉は、港町で、今も「佐兵衛」と屋号で呼ばれている家の長男でしたが、商売は家族に任せ、本人は山師でした。大吉は既に結婚し、子どももいたのです。二人は許されない関係でした。二人の間に女兒が産まれましたが、祖母は一人で育てました。その後、祖母は別の男性の後妻になりましたが、8年ほどで離婚しました。やがて、温泉町に引っ越して、料理屋「菊乃屋」を開き、かなり大きい商売になったようです。偉ぶる男の裏の裏まで知って、女将として全てを仕切って働きましたが、賭け事も好きだったようです。そして、30歳の時、再び大吉との間に、男児、女兒が生まれました。その男児が私の父です。すぐに、子どもたちは大吉に認知され、姓だけは実父のものになりました。父は小学校に入ると、「菊乃屋」の菊池やゑの息子なのに、別の姓で呼ばれ、揶揄され、自分の両親の関係を知り、父を嫌悪しました。苦しむ息子を見て、小学校を卒業するに際し、祖母は子どもたちを養子縁組により自分の養子にし、菊池の姓に戻しました。私の父はそんな母、父、異母兄弟への愛憎に葛藤が大きかったようです。けれども、大吉の家とも縁戚関係となり、行き来が始まり、先年、「佐兵衛」の跡取り息子が、私に古い戸籍謄本の写しを送ってくれました。

祖母は浄土真宗の門徒でした。自分に引け目があったのでしょうか。人眼につかないような時間帯にお参りによく行ったと聞いています。やがて戦争が始まり、料理屋の商売も寂れ、娘家族が住む樺太まで働きにいきました。一方、私の父がキリスト教徒になり、牧師になりたいと言います。祖母は愛する息子が願う道なら、正しい道だ、息子が信じる神様なら、本当の神様だと、息子の信仰に従い、クリスチャンになりました。無学な自分に代わって、愛する息子が信仰してくれていると信頼したのでしょうか。父が牧師となり、一緒に暮らし、初めて穏やかな日々が始まりました。父が結婚し、私が生まれた、ちょうどその年、大吉は「妻が亡くなり、やっと結婚できる」と言って、私たちが住む北海道に祖母を訪ねてきました。その時祖母は60歳でした。私の父は断固拒否したそうです。その後、日を置かず大吉は亡くなりました。遠く離れていても、死ぬまで、忘れ得ぬ人だったのでしょうか。

働き続けた祖母は「人を使うということは人に使われるということだ」と母に話したそうです。家族、子どもを守るためには、身を捨てても構わない人でした。普段は無口で、手早く家事をし、煙管で煙草を吸って、ぐっと睨む行動的な祖母には「寄らば切るぞ」というオーラもありました。気の弱い人は祖母を苦手としました。孫の私達は、苦しむ父を見てきましたが、大吉の祖母への愛に免じ、「良かった」と大吉、やゑを受け入れています。祖母はやはり、大吉の家庭にヒビを入れ、子どもに肩身の狭い思いをさせた自分を許せないという苦しみがあったのでしょうか。臨終に讃美歌を聞きながら、「イエス様、頼みます。イエス様、頼みます。」とひたすら主の憐れみにすがって逝きました。